

## 資料紹介 秋山平十郎作《加藤清正像》について

竹原明理（美術工芸）

はじめに

熊本博物館には、加藤清正の肖像・肖像画が数点收藏されている。そのうち、本作は衣冠束帯を身に着けた清正の姿で、清正公信仰に基づいた神像としての性格を持つ。当館の寄贈資料台帳によれば、一九六二年（昭和三七）三月一七日、熊本市新南部（現・熊本市東区新南部）の個人から寄贈されたことがわかる（寄贈番号は〇六二〇七号）。当館への收藏経緯や、收藏以前にどのような場所で、どのように保管されてきたのかは、残念ながら不明である。

本作は、当館リニューアル後の常設展示室にて展示予定だが、破損や劣化が著しく、展示に向けて、平成二七年度に修復を実施した<sup>1</sup>。この小論では、本作の概要、劣化状況の概要のほか、本作の制作者である「秋山平十郎」について、ごく簡単ではあるが紹介しておきたい。

### 1. 資料の概要

本作は、桐材（一部、桧材）の寄木造りに彩色が施された、衣冠束帯姿の加藤清正の座像である【図一、二】。頭部には、玉眼が嵌め込まれ、髪の毛、ヒゲ、眉毛のほか、もみ上げ、まつ毛が細筆で細かに描かれている。顔はやや面長に造られ、両目の位置がやや近い。黒い衣には、透かし紋があり、桔梗と折墨という二つの加藤家家紋を確認することができる。このうち、いくつかは後年の補修のためか、塗り潰されている。桔梗紋は袴にも左右一つずつ描かれているようだが、汚れやスレがひどく、はっきりと読み取ることができない。手の甲には、指の関節のほか、頭部と同様、細筆で毛が描かれている【図三】。

手、頭のほか、冠、太刀、勺、束帯、平緒の房といった小道具は着脱可能である。また、袴を身に着けた膝前と衣を身に着けた胴体部分も分かれるようになっていて、像の底板も取り外すことができ、その両面には墨書がある。台座は組み上げ式となっている。台座正面には、二匹の虎が彫り込まれおり、畳座の天板裏側にも墨書がある。

台座・畳座を組み上げた上に、清正像を載せる。本作の墨書から、制作年代は一八五二年（嘉永四）、作者は「秋山平十郎」という人物であることがわかる。後述するが、本作は現時点で確認できる秋山平十郎唯一の現存作品である。なお、本作の法量は、以下のとおり（単位はセンチメートル）。

総高（像と台座） 七六・五（像高は五一・二（冠を含む）。台座は二五・三）

幅(台座) 六四・二(像幅は六一・九)

奥行(台座) 四四・六(像奥行きは三四・二)

清正の菩提寺である本妙寺の浄池廟近くの寿像殿には、等身大の清正の寿像が安置されている<sup>2</sup>。これは御神体であるため、普段目にすることはできない。江戸時代中期から近代にかけて、清正信仰の高まりとともに、清正像は祭神としての需要が増大し、小ささまざまな像が作られた。本妙寺には、総高八七・〇センチメートルの清正像(作者不明)も所蔵されているが、これは、出開帳の際の身代わりとして造られたとされている<sup>3</sup>。面長に造られた頭をはじめとした、全体的な造りが本作と非常に近似している。名古屋市秀吉清正記念館には、本作よりもやや小ぶりの《清正公坐像》がある(像高は三二・四センチメートル)。これは、細川斉茲が文政七年(一八二四)に、日蓮宗寺院で活動した仏師・林如水に命じて作らせたものであるが<sup>4</sup>、本作とは作風が異なる。

## 2. 墨書について

像の底板には、両面に墨筆が記されている。底板の表(台座と接する面)は青く塗られており、その上に墨筆がある。また、畳座の内側にも墨書が見られる。各墨書の内容は、【図四】【図五】【図六】に記したとおりである(旧漢字は新漢字に改めて表記した)<sup>5</sup>。

三つの墨書には、本作の制作時期、関わった人物などが記されている。像底板の墨書から、迎町(現・熊本市中央区迎町)に住む「佛師」の「秋山平十郎」が二九歳の時、嘉永四年の五月から六月にかけて、本作を造ったことがわかる。米屋町三丁目を下った「川之道前崎」が制作場所であろう<sup>6</sup>。「商売はんしう」「武軍(運力)長久」の文字は、清正公信仰に基づいた商売繁盛と武運長久が祈願されていることを示す。

畳座天板の裏側には、中唐人町(現・熊本市中央区中唐人町)の「万屋 卯兵衛」の名が記されている。この人物を、本作の依頼主と見るか、台座の制作者と見るか、現時点での確証は得られていない。同墨書には、像底板に記されたものと同時期の「嘉永四歳 亥 五月下旬」の文字があり、像と一緒に納められたことがわかる。

## 3. 秋山平十郎について

本作の作者である「秋山平十郎」は、生人形師として知られる。本作の墨書では「佛師」となっているが、仏師としての活動は管見の限り記録がない。本作も、仏像というよりは人形に近い。「生人形」は、幕末から明治初期にかけて、人気を博した等身大人形の見世物である。特に、熊本からは、松本喜三郎(一八二五―一八九二)、安本亀八(初代。一八二六―一九〇〇)といった有名な生人形師が輩出された。

秋山平十郎は、松本喜三郎の弟子とされる人物だが、その生涯は不明な点が多く、謎の生人形師ともいえる。生年は不詳だが、熊本に生まれ、一八六七年（慶応三）、明治維新を迎える前に梅毒で死去したとされている。見世物研究の嚆矢として知られる朝倉無声（一八七七―一九二七）は、肥後の古老から聞き取ったという生人形の話を記している。主に喜三郎と亀八が中心となっているが、そこに秋山平十郎の記述もある。無声によると、一八五三年（嘉永六）の春に、地元・熊本の地藏祭の造り物を作る中で、喜三郎が「三味線師の平十郎」を助手としたとある。しかしながら、喜三郎は一八四八年（嘉永元）に上方へ出ており、年号は一致しない。

一八五六年（安政三）一月、喜三郎の江戸における二回目の生人形興行《正うつし生人形》の案内冊子には、「肥後国熊本 細工人 松本喜三郎 同平十郎 太夫元 小嶋万兵衛」とあり、喜三郎と共に生人形の制作を行っていたことがわかる<sup>7</sup>。無声の記した年代に齟齬はあるが、熊本時代からの縁故によって喜三郎・秋山平十郎が協働することになったのはたしかであろう。この興行は、六二体（一説には七二体）に及ぶ生人形を使って、《安達ヶ原一ツ家》《桑仙人》《忠臣蔵》《近江のお兼》といった歌舞伎などの芸能に取材した一二場面が表されたもので、喜三郎の代表作の一つとなっている。

その後、秋山平十郎は、一八五七年（安政四）頃に喜三郎より独立し、からくり人形を手がけた竹田からくり一座の竹田縫殿助と組み、生人形とからくりを合わせた興行を精力的に行い、菊人形なども手がけている。引札や日記などには、秋山平十郎の名を多数見ることができる。しかしながら、これまでその作品は確認されていない。そのため、本作が現段階で確認できる唯一の現存作品であり、生人形の調査・研究上、貴重な一作といえよう。

#### 4. 劣化状況について

本作は劣化が進行しており、像・台座ともに全体にわたって、彩色層の亀裂と剥落が見られる。寄木の接合部分随所にひずみが生じ、部材の欠失が数ヶ所確認される【図七】【図八】。また、指先や足先、着物の縁などに磨耗や虫損痕、あるいは動物の食痕が見られ、ホコリなどによる汚れが全体にわたっている。特に、手や袴など薄い色で彩色された部分には、筆で書いたような薄茶色の汚れが目立つ。そのほか、後年の補修が散見されるが、雑な部分も多い。しかし、これらの補修は、本作が人々に長年親しまれてきたことを物語るものでもある。繰り返し修理されながら、秋山平十郎たちが本作に込めた清正公信仰は引き継がれてきたといえよう。

今回の修復では、全体の汚れを可能な限り除去し、彩色の剥落止めと古色補彩、欠損箇所の補作整形を行う仕様とした。当館リニューアルの際には、本作を含めた多数の修復された資料を公開する予定である。

おわりに

以上、秋山平十郎作《加藤清正像》について述べてきた。清正公信仰あるいは美術的価値の観点からすれば、本作はその俎上にあがるものではないかもしれない。しかしながら、これまで述べてきたとおり、本作は現存する唯一の秋山平十郎作品であり、大坂・江戸に出る前、熊本における生人形師の活動を知る手がかりとなる。また、本作の制作経緯や来歴がわかることによって、江戸中期から近代にかけて高まった清正公信仰、特に商人・庶民レベルにおける清正像の展開についても明らかになることがあるかもしれない。本稿を、今後も引き続き調査を行う上での試論としておきたい。

〈謝辞〉 本稿の執筆にあたっては、以下の方々にご協力・ご教示をいただきました。伊藤加奈子さま、浦叡學さま、小林貴代さま、熊本市歴史文書資料室の皆さま。末筆ながら、ここに記して感謝申し上げます。

〔参考文献〕

- 朝倉無声 「生人形の話」『見世物研究 補遺』 春陽堂、一九二八年。  
加藤清正と本妙寺の至宝展実行委員会編 『清正公四〇〇年遠忌記念 加藤清正と本妙寺の至宝展』 展覧会図録 二〇一〇年。  
熊本県立美術館編 『生誕四五〇年記念展 加藤清正』 展覧会図録 生誕四五〇年記念展実行委員会、二〇一二年。  
国立歴史民俗博物館 『国立歴史民俗博物館資料目録「9」 見世物関係コレクション目録』 二〇一〇年。

- 1 本作の修復は、福岡県糸島市の浦仏刻所に委託した。修復方法等については、修復完了時に熊本博物館に提出された『文化財修理解説書 熊本市立熊本博物館 木造加藤清正神像』において詳細な報告がなされている。  
2 『清正公最初霊像御出現縁起』によれば、「公御存命中、慶長十四年熊本縣上益城郡坂本村播磨慶山ト云ヘル佛工ニ命セラ」れたものとされるという（加藤清正と本妙寺の至宝展実行委員会 『清正公四〇〇年遠忌記念 加藤清正と本妙寺の至宝展』 展覧会図録 六二頁）。  
3 加藤清正と本妙寺の至宝展実行委員会 『清正公四〇〇年遠忌記念 加藤清正と本妙寺の至宝展』 展覧会図録 六二頁。  
4 熊本県立美術館編 『生誕四五〇年記念展 加藤清正』 展覧会図録 一七九頁。  
5 墨書の翻刻は熊本博物館の木山貴満（歴史担当学芸員）が行った。  
6 米屋町三丁目町内の内、「川之道前崎」がどこか、残念ながら、場所の特定には至らなかった。「前崎」は個人宅と推察される。  
7 平十郎が「秋山」の姓を名乗るのは、独立後とされているが、今回の墨書から熊本においても「秋山」を名乗っていたことになる。



【図二】背面（修復前）  
撮影：浦仏刻所



【図一】正面（修復前）  
撮影：浦仏刻所



【図三】右手（修復前）  
汚れが目立つが、手の甲に間接や毛が描かれている。  
撮影：浦仏刻所

【図四】像底板裏（修復前）  
撮影：浦仏刻所

嘉永四年  
亥 五月下旬  
迎町住  
佛師  
年廿九才秋山平十郎  
米屋三丁目  
川之道おひ（り？）て  
前崎内二而  
之作  
商売はんしふ  
武軍（運力）長久





【図五】像底板表（修復前）

撮影：浦仏刻所

四年

亥 六月 吉日

迎町之住

米屋三丁目下り

川之道前崎内

佛師

平重郎（花押）



【図六】畳座天板裏面（修復前）

撮影：浦仏刻所

嘉永四歳

亥 五月下旬

肥後熊本中唐人町

万屋

卯兵衛



【図七】頭部の劣化状況（修復前） 撮影：筆者



【図八】足部の劣化状況（修復前） 撮影：筆者